

ゆきぎのみち

日本古神
道研究会

今月も先月号に引き続き、ご神示の御歌をお届け致します。今の人の世、世界の流れには、皆様も疑問をお持ちだと思いますが、神様のご意図といかに離れてしまい、そして背いてしまっているかを痛感いたします。

【神の子、人としての尊厳】

自分を忘れ辱めることは、

人類の親である神への親不孝

神の与えし寿命、神の与えし使命

即ちおのが天命をもっと大切に致せ

自分が何のために生まれたか

自分が何を為さねばならないのか

人として生まれしことを顧みよ

人が動物とは異なり

『万物の霊長』といわれるゆえんを探ってみよ

神の子人として、尊い御霊を授けられ

人の世において行うべき役目があるからではないか

寿命が来たりて人の世を旅立つまでに

その大本の自分自身に問いかけてみよ

おのが御霊に問いかけよ

すべてのものは一点より発し一点に帰る

わかりにくければ太陽を見よ

朝日という一点より大宇宙のすべてを

遍く照らしめぐり行くであろう

一点より大宇宙の全てを照らしかけめぐる

夕日は全てのところから一点に帰って沈み行く

この理は森羅万象すべてに通じる

古の神人の如く神に通ずるものたれ

それには御霊を磨け、御霊より発する念にて通ずる

人にはそれぞれ天命がある

天から与えし使命と天から与えし寿命じゃ

それゆえ勝手に寿命を縮める自殺は大罪ぞ

また天の与えし使命と異なる人生は意味がない

稲はどこまでいっても稲ぞ

どんなに栄養を与えても林檎や蜜柑になることはない

今世の者は、おのが天命わかつておるのか

自分の人生は自分のものなどと勝手に申し

自分が如何にその元からはずれ

異なる行き方をいたしているか

だからこそ祭り（間釣り）合わせが必要なのだ

「御祭りには万難を排して出席せよ」と伝えし所以ぞ

時に流され、忙しきに紛れ、

人としての尊厳を忘れた時には、

人は人としての生活なりわいを離れ

畜生とさして変わらぬものとなり、光輝くものはない

【人は自然の一員なり】

自然の恵みは、一粒万倍に例えられる如くに

生まれ、芽吹き、広がり行くものなり

それは荒涼たる大地の中からも

新たなる命の息吹を芽生えさせ

葉を落とした枯れ木のように見える樹木からも

新芽を出す

時来たらば、蕾を持ち、花を咲かせ

実を実らせるものなり

季節の廻りと共に

神の歩みに添うて

神の恵み受け、自然は営みを続ける

芽吹き、新たなる命生まれ出ずるは

これ天地自然の理なり

それは、その都度その都度、節目節目にて

新たなる恵み受けしところより、生まれ出ずるものなり

風吹くも、水清らかなるも

また豊かなる自然すべて神の作りし物なり

人もまた自然の一員なり

人が、神を求め、神に願ひ事するように

自然の声を聞き、自然の恵みを受けよ

大自然の木々や生き物すべてが

本来の営み求め続けるに

万物の長たる人が自然の声から掛け離れ

己勝手に生きてはいないか

木々が新たな芽ぶきなすも、花咲かせるも

一日のめぐりの中で目覚め活動し

季節のめぐりの中で、果実が色づき熟して行く

そのめぐりの中に、命受け継ぎ芽吹かせる

便利なるは、良きことのように思うであろうが

夜になっても、こうこうと明かりがつき

季節でもない時に、果実実らせる

昼と夜との自然の理にも背を向ければ

季節のめぐりにも背を向け

人は人の力のみで生きると申すのか

太陽の光りも、潮の流れもいらぬと申すのか

人は自然の中に生かされ、その生を受け継ぐものぞ

自然より遠ざかり、

そのリズムから離れたものは病となり、

命の元としての種も減少す

自然の声を忘れてはいないか

自然の声は、

常の揺らぎ迷いとは異なるところにて感応致すもの

自らの中の深くにある本体に響くもの

感動を呼び起こせ。魂を呼び覚ませ

自然の声も聞かずに何が開発か

人の本体の悲鳴も聞かずに何が先端医療か

目をつぶり耳をふさいで

日々進んでいる事に早く気付け

よく心せよ

人は自らの手にて、その命を絶とうとしてはいないか

自然と共生し、自然の恵みの中にこそ

人は生きられ、人としての値打ちがある

天地自然の理を自らのものとせよ

川清らかなるが何を語るか

海辺の波が何を語るか

木々の間を通る風が何をささやくか